

『概念メタファーとマルチモーダル・メタファー研究
—日本の文化・社会に関する題材を中心に』

齋藤隼人

学位論文の要約

本論文は概念メタファー理論に基づき、社会の広範な事象をその背後にはたらく人間の認知システムから考察し、言語学から新たな知見を加えることを目的とする。人間の言語、心理、政治、経済、歴史、文化など、一見すると繋がりを見いだすことが難しいように思える領域の事象に対し、本論文はメタファーという観点から統一的な分析を与えることを試みる。

本論文が理論的に依拠する概念メタファーとは、事象 A と事象 B の共通性を見出し“A is B”と対応づける認知能力によるものであり、自分自身に対する内的な理解および環境に対する外的な理解の根幹をなすものである。われわれは抽象的な概念を、具体的な身体経験に見立てるメタファーによって理解している。時間や人生や恋愛といった、生きていく上で重要な概念を比喩的に理解していることが、これまでさまざまな先行研究により明らかにされ、その適用範囲が拡大しつつある。

とりわけ概念メタファーの提唱者であるレイコフ（1996）は、アメリカ政治における保守（Conservative）とプログレッシブ（Progressive）の言語使用に潜む、心理・社会的背景を詳細に分析した。このレイコフの研究の方向性を踏襲し、本論文は日本社会の心理的・社会的背景をメタファーから明らかにすることを狙いとしており、具体的には第4章で日本統治時代の台湾における概念メタファーに着目する。また本論文は、「豊かであることは幸福」「働くことは美德」といった社会的・文化的な価値観さえも、比喩的な理解に基づいていることを第5章で示していく。

さらに本論文の分析方法における特徴は、概念メタファーの例証において、新聞に掲載された風刺漫画や映画など、言語以外の表現モードによる「マルチモーダル・メタファー」に着目する点にある。メタファーが概念的次元に生じているのであれば、それが言語表現だけではなく非言語的側面に発現して然るべきである。意味を概念化の次元に還元する認知言語学では近年、マルチモダリティが非常に注目されている。本研究もそのような研究動向に沿い、広く非言語的な表現から概念メタファーの存在を探究する。

本論文の構成は以下の通りである。第2章では、研究の理論的背景として、認知言語学の概念メタファー理論とマルチモーダル・メタファー、及びそれらの理論が前提としている「概念」について概観する。また、言葉の意味と概念の関係について、プロトタイプ意味論、フレーム意味論、概念ブレンディング理論を参照する。次に、心理学・精神分析学における概念に関する先行研究を参照する。これまで、言語学、心理学・精神分析学、生物学・脳神経科学、人類学、哲学、宗教学など多くの学問分野において、概念についての研究が行われてきた。それらが概念という物理的・視覚的に観察不可能な分析対象に対して異なる周辺事象を用い、異なる目的意識に基づき研究を行っていることを述べ、様々なアプローチがとられてきた「概念」の問題を概念メタファー理論により包括的に扱う可能性を示唆した。

第3章の前半では、概念メタファーに関わるイデオロギー、教育、メディア、政治の問題を概観する。そして後半では、メタファーの印象及び視覚性の問題について考察する。概念メタファーは人間の意識の問題でもあるため、諸々の社会的な問題と密接に関わっている。したがって、過去の広範な社会に関する研究にでも、概念とその体系についての言及が散見される。社会において観察される種々の事象は、概念メタファーの本質から離れた周辺的事象と思えるかもしれない。しかし、概念メタファーの身体経験・経験主義的側面を強調するならば、集団としての社会的経験及び社会的規範が、個人の概念メタファーの習得に影響を与えていることは明らかである。

3.1 節では、概念メタファーとイデオロギー及び教育・メディアという分野における人間の概念体系に関する記述を概観する。3.2 節では、言語と政治、そしてメタファーと政治の関係について考察する。3.3 節では、メタファーの印象の問題について論述する。3.4 節では、「視覚性」という観点から概念メタファーの諸々の性質について考察する。イデオロギー、教育、メディアなどの広範な事象はいずれも、人間の言語と概念体系及び伝達手段に関わっており、ひいてはメタファーと印象の問題であると言える。メタファーの印象の問題は、KNOWING IS SEEING という概念メタファーに基づき、視覚性という観点から捉え直すことができる。

第4章では、日本統治時代（1895年～1945年）の台湾で発行された新聞に掲載されていた「臺日漫画」におけるメタファーを分析する。まず4.1節では、日本統治時代最大の先住民族による蜂起事件である「霧社事件」を描いた漫画におけるメタファーに着目し、分析する。次に4.2節では、漫画で数多く使われている存在のメタファー（ontological metaphor）と擬人化のメタファーについて概観する。4.3節では、漫画に描かれたメタファーに関して社会・文化的なアプローチによる分析を行う。具体的には、「小ささ」、「ジェンダー」、「家族」のメタファーという観点から分析を行う。そして4.4節では、漫画に描かれたメタファーに関して、心理学的なアプローチによる分析を行う。具体的には、国家としての日本を擬人化して描くメタファーについて「大人」、「青年」、「子ども」のメタファーという観点から分析を行う。本章では、これら分析の過程を通して、概念メタファー、マルチモーダル・メタファーを理解する上での、歴史的、社会・文化的、心理学的知識の重要性を示した。

第5章では、現代日本社会における概念メタファーの社会性を中心的なテーマとして論じる。概念メタファーの産出及び解釈と社会性、社会における価値観とは密接な関係にある。本章では、まず言語と社会性の関係及び日本のコンテクストに関する先行研究を概観し、それから流行歌や日本映画に見られるメタファーについて考察を進める。具体的には、常識・世間、日本文化論、流行歌、日本映

画という観点から、経済・金銭、仕事、家族、時間などの概念メタファーについて考察する。

第6章では、本論文全体のまとめ及び今後の展望について述べる。第4章や第5章の分析の成果として、一見複雑な要因から生起していると思われるさまざまな社会的事象が、実際には経験的基盤をもつメタファー的な認識に根ざしたものであることを示した。例えば国際関係は家族のメタファーで理解され、植民地主義という力関係は上下のメタファーによる認識に基づいている。これらの概念メタファー自体は決して特別なものではなく日常言語に浸透したものであり、その延長として社会の構造や思想、政策などの形成を助長するよう利用されていることがわかる。このようにして形成された国家としての価値観（例えば戦後日本の経済成長至上主義）は、個人の生き方の価値観とは相いれない場合もあり、それによって社会に不調和をもたらし得ることを指摘した。

さらに本論文は以下のことを示唆している。それは、視覚で捉えられ身体的に経験することのできる具体物に比べ、イデオロギーなどのように実体をもたず直接的な身体経験の基盤を欠く抽象物は自律性をもたず、それゆえその理解および言説は恣意的なコントロールを受けやすい、ということである。抽象物がどのようにして構造化され理解されているか、本論文のアプローチにより明るみにすることにより、「誰」が「どのように」われわれの社会を作っているかに迫ることが可能になると期待される。